

絵画に表現された富士山

中西 僚 太 郎*

Mt. Fuji in Pictures

Ryotaro NAKANISHI*

[Received 28 December, 2014; Accepted 3 August, 2015]

Abstract

This study surveys pictures of Mt. Fuji in the following three categories: Japanese paintings, pictorial mountain-climbing guide maps, and panoramic maps. To date, art historians have conducted many studies on pictures of Mt. Fuji. However, there have been no studies that consider pictorial mountain-climbing guide maps and panoramic maps as “pictures” of the mountain. Certainly, this study's major contribution to research on Mt. Fuji is its comprehensive understanding of “picture.” More importantly, the fact that most art historians have ignored panoramic maps drawn by Yoshida Hatsusaburo, Kaneko Jyoko, and others in the first half of the twentieth century is a mistake. They did examine Ukiyoe prints by Katsushika Hokusai, Utagawa Hiroshige, and others from the nineteenth century; nevertheless, both these Ukiyoe prints and the panoramic maps drawn by Yoshida Hatsusaburo were forms of commercial art. Geographers dealt with panoramic maps, which have been examined by other geographers and map enthusiasts. From a geographical perspective, Mt. Fuji drawn as a panoramic map is a valuable research resource. In addition, by examining Japanese paintings and pictorial mountain-climbing guide maps, Mt. Fuji is recognized to be an awe-inspiring subject, as well as the one that can be revered. Furthermore, by examining of panoramic maps, it is demonstrated that Mt. Fuji was recognized to be an object of modern tourism.

Key words : Japanese painting, mountain-climbing guide map, panoramic map, Gountei Sadahide, Yoshida Hatsusaburo, Kaneko Jyoko

キーワード : 日本絵画, 登山案内図, パノラマ地図, 五雲亭貞秀, 吉田初三郎, 金子常光

I. はじめに

富士山が世界文化遺産に指定された理由の1つには、絵画をはじめとした芸術作品の源泉となってきたことがある。富士山が古来、絵画にどのように描かれてきたかは、世界文化遺産としての富士山を考えるうえで、重要な研究テーマといえる。元来、風景絵画は、地表の様子を平面上に描

いたものとして、地図と共通する側面をもっている。前近代において絵図と総称されてきた地図類は、多分に絵画的な表現をとっており、また、鳥瞰図と称される絵画と地図の中間的な性格をもつ図も存在する¹⁾。そのため富士山が、絵図や鳥瞰図を含めた絵画にどのように表現されてきたかを検討することは、地理学的に有意義なことを考えられる。

* 筑波大学人文社会系

* Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8571, Japan

ところで、富士山の絵画で、今日もっとも人口に膾炙しているのは、江戸時代の葛飾北斎によって描かれた「富嶽三十六景」であろう。また、「富士参詣曼荼羅図」のような参詣図も絵画に含めることができるし、富士登山に関連して鳥瞰図風の絵図として描かれた富士登山案内図も絵画の一種とみることが可能である。そして、大正期以降の、吉田初三郎に代表される鳥瞰図（パノラマ地図ともいう）に描かれた富士山も広義の絵画に含めることができる。これらの富士山を描いた絵画のうち、日本絵画に関しては、美術史の分野で厚い研究成果の蓄積があり、富士登山案内図に関しても、まとまった紹介と検討がなされている。一方、大正期以降の鳥瞰図に描かれた富士山に関しては、ある程度の紹介はなされているが、十分な紹介と検討はなされていない。本稿では、日本絵画と富士登山案内図に関しては、従来の研究成果の紹介を行うとともに簡略な解説を加え、大正期以降の鳥瞰図に関してはオリジナルなデータを提示し、考察を加えることによって、日本において絵画に表現された富士山について総覧するとともに、表現内容の変遷について考察することにした。なお、検討対象は、現代のものを含めると際限がないので、第二次世界大戦以前の近代までのものに限定する。

II. 日本絵画史における富士山

1) 美術史における従来の研究

富士山を描いた日本絵画を集成した書物は、第二次世界大戦後に限ってみても、中野・成瀬(1982)をはじめとして、鳥居ほか(1998)、鈴木ほか(2000)、静岡県立美術館(2004)、山梨県立美術館(2005)、平林ほか(2008)などがあり、2013年の世界遺産登録後は、高階ほか(2013)、富士山世界文化遺産登録推進両県合同会議(2013)などが相次いで発行されている。これらの書物には古代から近現代までの各作品の解説とともに、古代から近世ないしは近代(明治期)までの富士山を描いた絵画の通史的な解説が、成瀬(1982, 2000)、山下(1998)、河野(2013)によってなされ、また、福士(2013)のような通史も発表さ

れている。

これらのなかでもっとも詳しい解説は、成瀬(1982)であり、同氏はその後、その解説をいっそう充実させた著作、成瀬(2005)を刊行している。同書は今日において、富士山の絵画の歴史に関してもっとも詳細な研究といえる。また、図像学の見地から富士山の絵画の歴史を検討した異色の研究として、竹谷(1998)もある。従来の解説のなかで、富士山の絵画の歴史を簡潔に要領よくまとめたものといえるのが、山下(1998)であり、その内容は山下(2002)のなかで、よりわかりやすく述べられている。そして、これらの従来の美術史分野の通史的解説で、鳥瞰図絵師ともいえる五雲亭貞秀(歌川貞秀、橋本玉蘭斎なども称する²⁾)の作品をとりあげているのは山下のみであり、その意味では地理学的に注目すべき内容といえる。そこで本章では、主として山下の解説によりながら、他の解説も参考しつつ、古代から近世までの日本絵画に表現された富士山について概観することにした³⁾。近世までの絵画に限定したのは、従来の富士山画の通史的解説が近世までのものに重点が置かれていること⁴⁾も関係するが、本章の日本絵画の検討は、本稿では次章で検討する富士登山案内図の前史的位置づけを有するためである。

古代から近世までの富士山を描いたおもな日本絵画を年代順に示したのが表1である。また、鳥瞰図といえる五雲亭貞秀の作品のみを別に示したのが表2であるが、貞秀の作品は幕末期のものであるため、年代的にみると、ほぼ表1に続くものといえる。なお、表に示した江戸時代以降の画家は、富士山の絵画を複数作成しているのが通例である。その場合、表中では画家の代表的と思える絵(ないしはシリーズ)を1点のみとりあげて示し、可能な限り作成年次が明らかなるものをとりあげた。

2) 古代・中世の富士山画

富士山が絵画として描かれるようになったのがいつかは定かではない。平安時代には各地の名所を描いた屏風が盛んにつくられ、それらには名所絵として富士が描かれたと考えられるが、それら

表 1 富士山を描いたおもな日本絵画.

Table 1 Major Japanese paintings of Mt. Fuji.

| 作品名 | 作者 | 作成年代・作成年 | 備考 |
|------------|----------|-----------------------|---------------|
| 聖徳太子絵伝 | 秦致貞 | 1069 (延久元) | 法隆寺献納宝物 |
| 一遍聖絵 | 円伊 | 1299 (正安元) | |
| 伊勢物語絵巻 | 作者不詳 | 鎌倉時代 | |
| 富士三保清見寺図 | 雪舟等楊 (伝) | 室町時代 | |
| 富士参詣曼荼羅図 | 狩野元信 (印) | 室町時代 | |
| 富嶽図 | 仲安真康 | 室町時代 | 禅林の富士図 |
| 富嶽図 | 賢江祥啓 (伝) | 1490 (延徳2) | 禅林の富士図 |
| 富士八景図 | 式部輝忠 | 1530 (享禄3) 頃 | 連作の富士図 |
| 富士に杉図屏風 | 狩野永徳 (伝) | 桃山時代 | |
| 富士三保松原図屏風 | 狩野山雪 | 江戸時代初期 | 京狩野派 |
| 富士山図 | 狩野探幽 | 1667 (寛文7) | 狩野派 |
| 富士白糸滝図 | 池大雅 | 1762 (宝暦12) | 南画 |
| 百富士 | 河村岷雪 | 1767 (明和4) | 連作の富士図 |
| 神州奇観図 | 丹羽嘉言 | 1770 (明和7) | 南画 |
| 富嶽列松図 | 与謝蕪村 | 1778 (安永7)-1784 (天明3) | 南画 |
| 富嶽十二ヶ月図巻 | 狩野惟信 | 1781 (天明元)-1786 (寛政6) | 狩野派, 連作の富士図 |
| 富嶽図 | 円山応挙 | 1795 (寛政7) | 応挙派 |
| 富士越鶴図 | 長沢蘆雪 | 1794 (寛政6) | 応挙派 |
| 富士登岳図巻 | 小泉檀山 | 1801 (享和元) 以降 | 頂上図を含む |
| 駿州薩陀山富士遠望図 | 司馬江漢 | 1804 (文化元) | 洋画 |
| 紅玉芙蓉図 | 野呂介石 | 1821 (文政4) | 南画 |
| 富嶽三十六景 | 葛飾北斎 | 1831-1833 (天保2-4) | 連作の富士図, 浮世絵版画 |
| 富士山図屏風 | 谷文晁 | 1835 (天保6) | 南画 |
| 富嶽登龍図 | 狩野永岳 | 1852 (嘉永5) | 京狩野派 |
| 富士三十六景 | 歌川広重 | 1858 (安政5) | 連作の富士図, 浮世絵版画 |

中野・成瀬 (1982), 鈴木ほか (2000), 山下 (2002), 高階ほか (2013), 福士 (2013) により作成.

表 2 五雲亭貞秀の富士山画.

Table 2 Gountei Sadahide's paintings of Mt. Fuji.

| 作品名 | 作者 | 発行年 | 備考 |
|------------------|-------|---------------|-----|
| 富士山真景全図 | 五雲亭貞秀 | 1848 (嘉永初期) 頃 | |
| 三国第一山之図 | 玉蘭斎貞秀 | 1849 (嘉永2) 頃 | |
| 大日本富士山絶頂之図 | 五雲亭貞秀 | 1857 (安政4) | 頂上図 |
| 箱根山富士見平御遊覧諸所遠景之図 | 五雲亭貞秀 | 1857 (安政4) | |
| 富士詣独案内 | 橋本玉蘭 | 1859 (安政6) | |
| 不二両道一覽之図 | 五雲亭貞秀 | 1860 (万延元) 頃 | |

鳥居ほか (1998), 神戸市立博物館 (2000), 湯原 (2003) により作成.

は現存しないとされる。現存する富士山の絵として最古のものは、名所絵の造形を引き継いで描かれたと類推される物語・伝記に描かれた富士山で

ある。そのなかでも、作成年次が明確なもっとも古いものは、1069 (延久元) 年に作成された法隆寺献納宝物の「聖徳太子絵伝」における富士山



図1 富士三保清見寺図。
伝雪舟等楊。室町時代。永青文庫所蔵。

Fig. 1 Mt. Fuji and Seiken-ji Temple.
Attributed to Sesshu Toyo. Muromachi period. Owned by Eisei-Bunko Museum.

である。そこでは、聖徳太子が黒駒に乗って富士山を登るといふ説話のなかで富士山が描かれている。同様の造形の富士山は、鎌倉時代に作成されたと考えられる「伊勢物語絵巻」においても描かれている。また、一遍の遊行を描いた絵伝のなかには、富士山が描かれる場面があるが、絵伝のなかでもっとも古いものは、円伊によって作成された1299（正安元）年の「一遍聖絵」である。これらに描かれた富士山は、周囲から突出して忽然と現れ、急峻で円錐状に描かれており、当時、富士山は噴火する山、おそろしく高い山、神々の住む近寄りがたい存在として描かれていたことに特徴があった（山下, 2002, p. 38）。

富士山への信仰と直接関わる参詣図ともいえる図として、狩野元信の印がある「富士参詣曼荼羅図」がある。縦長の画面上部に富士山、下方に大宮浅間大社などを配置し、神社からの登山者も細かく描かれ、富士山は三峰形式で、各峰には仏像が配置されている。

室町時代には禅林において、富士図制作が隆盛しており、それらを代表するのが、仲安真康の「富嶽図」や賢江祥啓の筆と伝えられる「富嶽図」

である。そして、現在では模本と考えられているが雪舟等楊の筆と伝えられる「富士三保清見寺図」は室町時代の名品であり、その後作成される「富士三保松原図」の規範となった作品である（図1）。これらの図でも、富士山の山体は三峰形式で描かれており、三峰の富士は、江戸時代中期頃まで富士山を描く際の定型となっていく。また、1530（享禄3）年ごろの作品とされる、式部輝忠による「富士八景図」は、瀟湘八景にならった連作の富士図であり、江戸時代中期以降における連作の富士図の嚆矢ともいえる作品である。そして、これらの室町時代の富士図では中国伝来の水墨が用いられているため、中国の山水画の影響が強かった。

総じて、古代・中世の富士山は、人々の住む世界とは離れた神々の住む近寄り難い存在としてとらえられ、その絵には内在される富士山の靈性への関心が強く示されていたといえる（山下, 2002, p. 54-55）。

3) 近世の富士山画

富士山の絵画には、他の絵画と同様に、屏風絵として描かれたものが多くある。桃山時代の富士

山の絵を代表するのが、狩野永徳の筆とされる⁵⁾「富士に杉図屏風」である。金雲を多用した煌びやかな典型的な桃山時代の金碧障屏画である。江戸時代初期に作成された京狩野派の狩野山雪による「富士三保松原図屏風」は、基本的な図案は伝雪舟等楊の「富士三保清見寺図」を踏襲しつつ、横長の画面を生かした独自の構図をもつ絵である。

江戸時代には、御用絵師であった狩野派が画壇の主流を占めるが、その代表者でもある狩野探幽（狩野永徳の孫）は多くの富士山の絵を描き、現存する図は20例を超える。なかでも1667（寛文7）年の「富士山図」は代表作であり、实景の観察をいかしつつ、瀟湘八景や蓬莱山などのイメージを重ね合わせた図とされる（山下、2002, p. 44）。他の狩野派の絵画として、表1には狩野惟信の「富嶽十二ヶ月図巻」と、狩野永岳の「富嶽登龍図」を示したが、前者は富士の姿を1月から12月まで変化させる形で描いた「月次絵」という大和絵の伝統形式に基づく連作の富士図である。後者は、富士山に向かって龍が上昇する姿を描いた図で、この図以外にも多くの画家が「富嶽登龍図」を描いているが、富士山の靈性を龍の形でイメージしたものといえる（山下、1998, p. 226）。

一定の様式美に基づいた粉本主義的な狩野派の絵画に飽き足らず生まれた画風が、南画と呼ばれる中国の文人画の系譜を引く絵画と、円山応挙を始祖とする応挙派である。南画に関して、その代表者といえるのが、関西では池大雅、与謝蕪村、関東では谷文晁である。池大雅は25例以上の「富士図」を描くとともに、少なくとも3回富士山へ登頂しており、その経験が絵画のなかに反映しているとされ、その1つが「富士白糸滝図」である（山下、1998, p. 223）。また、俳人として知られる与謝蕪村も富士の絵をいくつも描いており、「富嶽列松図」はその代表作である。手前の松林の背後に、雪に覆われた真っ白な富士が鮮やかに描かれている。谷文晁も多くの富士図を描いているが、晩年の心象風景としての富士を描いた1835（天保6）年の「富士山図屏風」はその

代表作とされる（福士、2013, p. 59）。同じく南画の系統の図としては、尾張の南画の基礎を築いたとされる丹羽嘉言による「神州奇観図」があり、洋風画家に先んじて富士山の实景を模写したかのような図である（鈴木ほか、2000, p. 46）。また、紀州の野呂介石も南画の系譜に連なる画家であるが、「紅玉芙蓉図」は赤く富士山を描いたものとしては最初のものとして位置づけられる。応挙派に関しては、円山応挙は旅を好まず、自身は富士山画に関しては、風景表現上では目立つ作品は残していないとされるが、1795（寛政7）年の「富嶽図」がある。なお、その門下の長沢蘆雪には「富士越鶴図」があり、急峻な山型で描かれた富士山の周囲を鶴が連なって飛ぶという奇抜な構図をもつ作品である。

周知のように近世には浮世絵版画が流布したが、浮世絵版画の富士山の絵を代表するのが、葛飾北斎の「富嶽三十六景」である。そのなかでも、赤富士と通称される「凱風快晴」は、もっとも周知されている作品であろう。これに対抗する形で描かれたのが、北斎と並ぶ浮世絵師の歌川広重による「富士三十六景」であり、その作品の構図には北斎の影響も認められる。両者の「三十六景」は連作の富士図の一種と位置づけられるが、北斎は「富嶽百景」、広重は「富士見百図」という百種の富士を描いた連作も残している。そして、これらの「百富士」の先駆と位置づけられるのが、河村岷雪による「百富士」である。岷雪は、狩野派の粉本主義を批判し、自ら各地を旅して廻り、各地から見える富士の真の姿を写生した（成瀬、1982, p. 204-205）。

近世後期には、司馬江漢をはじめとした洋風画家によっても富士山が描かれるようになる。江漢は多数の富士山画を描いているが、その1つが、「駿州薩陀山富士遠望図」である。油絵の技法によって描かれた図で、表題にある薩陀峠からの眺望に、矢部山からの眺望を応用した構図となっている。この江漢らの作画で注目されるのは、实景のスケッチと本画が強く結びついている点にある（山下、2002, p. 47）。

また、富士山の絵画には、頂上部のみを描いた



図 2 三国第一山之図。
 玉蘭斎貞秀写. 1849 (嘉永 2) 年頃. 神戸市立博物館所蔵.

Fig. 2 Landscape Prints of Mt. Fuji.
 Created by Gyokuransai Sadahide around 1849. Owned by Kobe City Museum.

図がある。その嚆矢となるのが、1795 (寛政 7) 年の富士登山時のスケッチをもとに描かれたとされる小泉檀山の「富士登岳図巻」であり⁶⁾、ここでは、山頂部の様子がリアルに描かれている。

総じて、近世になると、富士山は身近なものとして存在し、その霊性はとらえにくいものとなっていき、自ら目にしたものを、自らの表現方法で絵画化される方向をたどっていったといえる (山下, 2002, p. 55)。また、池 大雅や小泉檀山のように、実際に画家が富士登山をした経験を絵に反映させていることも注目される。

4) 五雲亭貞秀の富士山画

五雲亭貞秀とは、幕末に浮世絵師、地図作家、鳥瞰図絵師として多面的に活躍した人物である (神戸市立博物館, 2000, p. 83)。そのなかで富士山を描いた図は表 2 に示したように 6 点確認できる。このうち、1848 年頃 (嘉永初期) の作品と考えられる「富士山真景全図」は、火口を真上から描いた図であるが、火口にはもう 1 枚の図が折り畳まれており、引っ張ると立体的に立ち上がる仕掛けとなっている図である (湯原, 2003, p. 10)。

1849 年頃に発行された「三国第一山之図」は、富士山そのものを主題とした意味では、貞秀の富士山図としては代表作ともいえる図で、画面の中央部に富士山が、噴煙をあげ茶色のゴツゴツとした山容をもつ山として描かれ、そこを登頂する人々の列がいくつも描かれている (図 2)。なお、この頃、貞秀は富士登山を行っており、山頂から地上をパノラマとしてみた経験が、浮世絵師から鳥瞰図絵師へと転換する契機となったという見解もある (神戸市立博物館, 2000, p. 112)。

「大日本富士山絶頂之図」は、上記の頂上のみを描いた富士山画の系譜に位置づけられるもので、剣ヶ峰 (図中では剣ノ峯)、駒ヶ嶽、金明水、銀名水、大日堂など、富士山頂部の各所の名称を短冊の名札で示して、克明にかつ誇張して描き、山頂をめぐる人々の様子も描かれている。なお、山下 (2002) の通史的解説では、貞秀の富士山図をとりあげているものの、この図以外については言及していない。美術史の分野において、貞秀の作品は等閑視されてきたといえるであろう⁷⁾。

1857 (安政 4) 年に描かれた「箱根山富士見平

御遊覧諸所遠景之図」は、箱根の関所から峠を越えて駿河湾に下る途中の富士眺望の名所として知られた「富士見平」からの眺めを描いたものであり、画面上部には山頂付近に雪を被った富士山と雄大な裾野が緑色で秀麗に描かれ、下部には三島から由井にかけての東海道、駿河湾一帯が描かれている（神戸市立博物館、2000, p. 83）。「富士詣独案内」は、江戸日本橋から富士に詣でる際の道案内図であり、画面右手の江戸から左手の富士山へ至るさまざまなコースが描かれ、富士山は薄い緑色でシルエットのように描かれている。「不二両道一覽之図」は、同様に江戸日本橋から富士への道筋を示した案内図であり、江戸を画面の下部に、富士を画面上部に配し、江戸上空から富士を遠望したような構図で描かれている。富士山は三合目付近まで雪を被った姿で描かれ、須走口ほかの登山口から山頂までの登山道も描かれている（鳥居ほか、1998, p. 143）。

貞秀の富士山画は、「富士山真景全図」を別にすれば、すべて鳥瞰図といえるものであり、自らの富士登山の経験を反映した富士登山案内図ともいえる図が含まれている。近世の純粋な富士山画と、明治期の鳥瞰図的な登山案内図との中間的性格を示す図といえ、両者の橋渡的な位置づけをもつ図として評価することが可能である。

III. 富士登山案内図における富士山

1) 富士登山案内図について

本章で扱う富士登山案内図は、麓から山頂までの道筋が、平面図ではなく、鳥瞰図風に、絵画的に描かれた図を意味する。絵画的とはいえ、近世の表口の富士登山案内図には、後掲のように絵画としての表現は乏しく、図面といったほうがふさわしい図が少なくない（近世には図面一般を「絵図」と称する場合が多い）。明治期以降に作成された図は、まさに鳥瞰図ともいえる図が多いが、後掲のように、大正期以降に作成された吉田初三郎らの鳥瞰図（パノラマ地図）とは異なる表現内容をもつものである。そして、これはすべて富士浅間信仰に基づく、富士登山の案内図としての性格をもっている。

このような富士登山案内図については、富士吉田市歴史民俗博物館（2000）において現存物の詳細な一覧が示され、その全貌がほぼ明らかにされるとともに、適切な解説も加えられている⁸⁾。同書のほか筆者の調査により、その画像が確認できた富士登山案内図について示したのが表3である⁹⁾。

登山案内図は、その性格から登山口ごとに区分することが可能であり、表3では富士吉田市歴史民俗博物館（2000）における区分を基本に、部分的に筆者による変更を加えた区分を示した。また、表中の登山案内図は、登山口ごとに可能な限り作成年代順に示した。この登山口について説明すると、表口とは大宮と村山を信仰登山集落とする登山口であり、南口とは須山、北口とは吉田と川口を、東口とは須走を信仰登山集落とする登山口である。各信仰登山集落自体を吉田口、須走口などと称する場合もある。また、東表口とは、1889（明治22）年の東海道本線の開通で御殿場駅が設置されたことにより、新たに設けられた登山口を意味し、御殿場口ともいう。各登山案内図では、各登山口からの登山ルートが画面の中央部に記されるが、他の登山ルートについても記される場合もある。以下、この登山口の区分に沿って図の検討を進める¹⁰⁾。

2) 表口・南口の案内図

表口に関する図は、江戸時代に作成されたものが多く¹¹⁾、明治期以降のものは北口に比べると少ない。表口からの案内図は、しばしば禅定図と称されており、絹本着色と木版墨刷の「三国第一富士山禅定図」「富士山禅定図」はその例である。表口の案内図は、「富士山表口絵図」や「富士山社堂行所図」「富士山名所之図」「富士山名所記」「駿河国富士山絵図」「駿河国富士山表口図」「富士山表口真面之図」など名称は異なっても、その構図はおおよそ同じである。その一例を示したのが図3であるが、画面下に駿河湾、その中央に田子の浦が描かれ、左に富士川、右に浮嶋が描かれる。そして、画面の中央には村山の集落と浅間神社が描かれ、画面の上部には村山から山頂への道筋が描かれている。また、「吉原宿田子之浦絵

表3 おもな富士登山案内図。

Table 3 Major mountain-climbing guide maps of Mt. Fuji.

| 区分 | 描かれる信仰登山 集落 | 作品名 | 作画・発行者等 | 作成年代・年次 | 印刷形態 | 大きさ： 縦×横 cm |
|-------------|----------------------------|----------------------|--|--------------|-------|----------------|
| 表口 | 村山, 大宮 | 三国第一富士山禪定図 | | 江戸時代後期 | 絹本着色 | 38.2×62.5 |
| 表口 | 村山, 大宮 | (富士山表口絵図) | | 江戸時代後期 | 木版墨刷 | 33.2×44 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 三国第一富士山禪定図 | | 江戸時代後期 | 木版墨刷 | 34.7×56.2 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山禪定図 | | 江戸時代 | 紙本着色 | 60.2×65.5 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山社堂行所図 | | 江戸時代後期 | 紙本着色 | 45.3×64 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山名所之図 | | 江戸時代後期 | 木版墨刷 | 31.1×40.1 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山名所記 | 駿州富士郡元吉原 富士見屋 (蔵板) | 江戸時代後期 | 木版手彩色 | 47.6×61.8 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 駿河国富士山絵図 | 富士山別当表口村山興法寺三坊 (蔵板) | 江戸時代 | 木版墨刷 | 31.3×40.2 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 駿河国富士山絵図 | 富士山別当表口村山興法寺三坊 (蔵板) | 江戸時代 | 木版手彩色 | 32.5×41.5 |
| 表口 | 大宮, 村山 | 吉原宿田子之浦絵図 | 吉野安五郎 (選), 梅寿 (写) | 江戸時代 | 紙本着色 | 84.2×101 |
| 表口 | 大宮, 村山 | 駿州吉原宿絵図 | 吉野安五郎 (板) | 1827 (文政10) | 木版墨刷 | 33×42.8 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 駿河国富士山表口図 | 富士郡大宮町 金明堂 | 江戸時代末期 | 木版墨刷 | 42.7×59.2 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山表口真面之図 | 富士山別当村山興法寺三坊 (蔵板) | 江戸時代末期 | 木版墨刷 | 46.3×64.3 |
| 表口 | 大宮, 村山 | 富士山表口正面図 | 駿州大宮神田橋 糺屋安兵衛 | 明治初期 | 木版手彩色 | 45.4×71.7 |
| 表口 | 大宮, 村山 | 駿河国富士山表口全図 | | 1878 (明治11) | 木版墨刷 | 48.5×66 |
| 表口 | 村山, 大宮 | 富士山表口真面之図 | 太田駒吉 (画工・彫工) | 1880 (明治13) | 木版墨刷 | 42.5×69.5 |
| 南口 | 須山 | 富士山須山口略絵図 | | 江戸時代 | 木版墨刷 | 39.2×54 |
| 北口 | 吉田 | 八葉九尊図 | | 1680 (延宝8) | 木版墨刷 | 40.5×28 |
| 北口 | 吉田, 川口, 須走 | 御山名所道之記 | | 江戸時代 | 木版墨刷 | 33.4×51.7 |
| 北口 | 吉田 | (浅間神社絵図) | | 1806 (文化3) | 紙本着色 | 82×82 |
| 北口 | 川口 | (北口本宮御師宿坊図) | | 1860 (万延元) | 木版墨刷 | 30.4×40.1 |
| 北口 | 吉田 | 富士山神宮麓八海略絵図 | | 江戸時代末期 | 木版墨刷 | 41×56.2 |
| 北口 | 吉田 | 富士山神宮并麓八海略絵図 | 藤原治俊 (画) | 江戸時代末期 | 紙本着色 | 32.5×50.5 |
| 北口 | 川口, 吉田 | 富士山神系御山絵図 | | 江戸時代末期 | 木版手彩色 | 66.5×26.3 |
| 北口 | 吉田 | (浅間神社図) | | 明治初期 | 木版墨刷 | 31×48.3 |
| 北口 | 吉田 | (富士山吉田口図) | | 明治初期 | 木版墨刷 | 31×40.2 |
| 北口 | 川口 | 富士山頂上御拝所御霊鏡図 | | 明治初期 | 木版墨刷 | 36.3×25.6 |
| 北口 | 吉田 | (富士山之図) | | 1882 (明治15) | 木版墨刷 | 33.1×47.3 |
| 北口 | 吉田 | 富士山北面真形絵図 | | 1882 (明治15) | 木版手彩色 | 32.8×46.9 |
| 北口 | 吉田, 川口, 須走 | 富士山長口便道略図 | 宮下兵平 (編集兼出版人) | 1884 (明治17) | 木版 | 27.3×39.1 |
| 北口 | 吉田 | 富士山北口本宮富士嶽神社 境内全図 | 東壽舎主人 霜鳥巴凌 (写生縮図), 青山豊太郎 (画作兼印刷発行者) | 1892 (明治25) | 銅版刷 | 42×57.9 |
| 北口 | 吉田 | 富士山北口全図 | 中村月嶺 (著作兼印刷発行者) | 1901 (明治34) | 銅版刷 | 38×50.6 |
| 北口 | 吉田 | 富士吉田口全図 | 今井芳男 (著作兼印刷発行者) | 1911 (明治44) | 銅版刷 | 39.5×55 |
| 北口 | 吉田 | 富士山北口全図 | 中村月嶺 (著作兼印刷発行者) | 1920 (大正9) | 銅版刷 | 40.1×55.1 |
| 北口 | 吉田 | 富士吉田口全図 | | 1929 (昭和4) | 銅版刷 | 38.7×53 |
| 北口 | 吉田 | 富士山北口全図 | 河津屋本店 (発売元) | 1929 (昭和4) 頃 | 銅版刷 | 37.4×49.8 |
| 東口 | 須走 | (富士参詣須走口図) | | 江戸時代 | 木版墨刷 | 47.9×33 |
| 東口 | 須走 | 東面略図 | | 江戸時代 | 木版墨刷 | 34.3×47 |
| 東口 (東表口) | 御殿場 | 富士山東表口新道御殿場 停車場図 | 東壽舎 巴凌 (写), 野木三平治 (出版者) | 1892 (明治25) | 銅版刷 | 24.9×33.1 |
| 東口 | 須走, 御殿場, 須山, 大宮, 村山, 吉田 | 富士山名細図 | 飯塚為吉 (印刷人), 大米谷太住 (発売所) | 1901 (明治34) | 木版手彩色 | 37×46.7 |
| 東口 | 須走 | 富士登山口全図 | | 1909 (明治42) | 銅版刷 | 39.7×54.9 |
| 東口 (東表口) | 御殿場, 須走, 吉田, 大宮 | 富士登山案内図 | 青木活版所 (印刷兼発行) | 1918 (大正7) | 銅版手彩色 | 26.8×38.7 |
| 東口 | 須走, 御殿場, 大宮, 吉田 | 富士登山案内図 | 青木活版所 (印刷兼発行), 伊勢谷商店 (販売所) | 1920 (大正9) | 銅版刷 | 27.8×39.2 |
| 東口 (東表口) | 御殿場, 須走, 吉田, 大宮 | 富士山立体図 | | 1940 (昭和15) | 紙本着色 | 96.8×61.8 |

1911 (明治44) 年の「富士吉田口全図」(筆者所蔵) 以外は、富士吉田市歴史民俗博物館 (2000) 所収のデータより作成。

描かれる信仰登山集落については、先頭のもものが当該図で主に描かれている対象であることを示す。

作画・発行者等の空欄は不明を意味する。

作品名の () は原題のないもの。

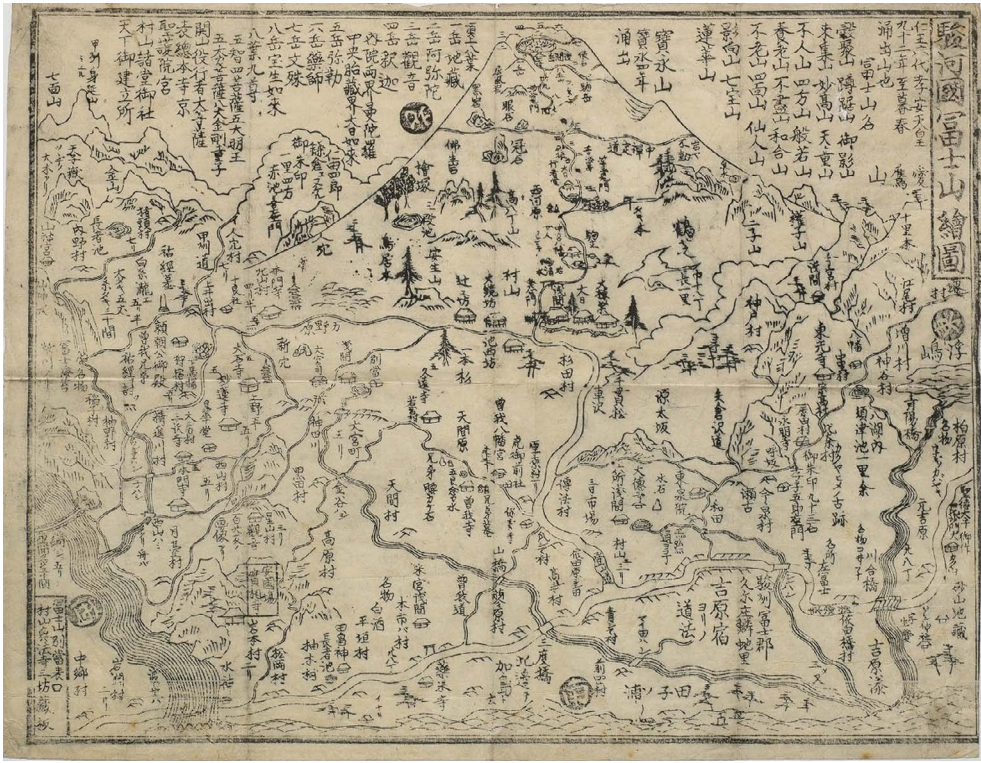


図3 富士表口の登山案内図。

原図の題名は「駿河国富士山繪圖」。江戸時代。表3中の同名で木版墨刷とあるものと同図。静岡県立中央図書館所蔵。

Fig. 3 Mountain-climbing guide map via Omiya and Murayama.

The map's title is "Shuruga no kuni Fujisan ezu". Edo period. This map is shown in Figure 3 as a single-color woodblock print under the same title. Owned by Shizuoka Prefectural Central Library.

図「駿州吉原宿絵図」は、東海道の吉原宿を主題にした図であるが、同様の構図をもつ図であり、吉原から大宮、村山を経て山頂に至る道筋が示されている。これらの図は、信仰登山集落としては村山よりも大宮が強調された図といえる。また、大宮が図の中央部に配置される図としては、明治期の「富士山表口正面図」「駿河国富士山表口全図」がある。

以上の表口の図は、後述の北口や東口の図のように、信仰登山集落としての吉田や川口、須走の集落やそこに位置する浅間神社を拡大して詳しく描いたものはなく、全体として東海道筋から村山もしくは大宮・村山を経由して山頂へと至る道筋を示した道案内図といえる。そして、信仰登山集

落として村山を画面の中央に置き、強調して描いているものが多いのは、村山の興法寺三坊蔵版¹²⁾のものがいくつもみられるように、主として村山の修験者がこれらの図の作成者であったためといえる。江戸時代の後半には、信仰登山集落としての村山は衰退する傾向にあり、東海道経由の登山者を、大宮を経由させずに、直接村山に呼び寄せるために、これらの図が作成されたとの見解もある(荻野, 2011)。表口に関しては、明治期以降のものが北口や東口に比べて少ないのは、図の作成の主体であった村山の修験者の活動が、衰退してしまったこととともに、明治期以降における表口の登山者が、北口や、新たに御殿場口が設けられた東口に比べて、相対的に少なかったこと

が理由として考えられる。

南口に関して知られている案内図は、江戸時代の「富士山須山口略絵図」のみである。須山の集落が画面の中央に描かれ、そこから富士山への登山道が描かれるほか、画面の下部には沼津宿や三島宿が描かれている。この案内図の配布者は、須山の御師であったと考えられる。

3) 北口の案内図

北口に関して、もっとも古いものは1680(延宝8)年に作成された「八葉九尊図」であり、案内図全体のなかでも最古の図といえる。これは、吉田から山頂への登山ルートを簡略に描いた図であるが、山頂を八葉の蓮華に見立て、両部の大日を中心に九尊の仏を記し、胎蔵界曼荼羅の影響のもとに描かれた図とされる。江戸時代に作成されたものであるが年代不詳の「御山名所道之記」は、簡略な表現の図であり、富士山麓だけでなく江戸と甲府からの道筋が示されている。江戸からの道筋としては、甲州街道を経て吉田へ、東海道で小田原を経て須走へ、甲府からは、川口を経て吉田へ至る道筋が示されている。登山ルートは、吉田からのルートが図の正面に描かれるほか、須走からのルートも描かれている。

北口の図は、信仰登山集落として吉田をおもに描いた図と、川口をおもに描いた図では図の描かれ方が異なる。吉田を描いた図から検討すると、1806(文化3)年の「浅間神社絵図」は、『甲斐国志草稿』に収録されている絵図であり、画面の下方に吉田の集落が、中央に浅間神社、上方に富士山が三峰形式で描かれている。作成の前後関係は定かではないが、この絵図の構図は、その後の吉田を経由した北口からの登山絵図に継承されたようである。「富士山神宮麓八海略絵図」「富士山神宮并麓八海略絵図」は、墨刷と手彩色の違いがあるものの、類似した図であり、「浅間神社絵図」と同様の構図をもつが、題名にもあるように、八海が画面の左右に大きく描かれている点に特徴がある。これらの図の版本は吉田の御師のもとにかつては伝わっていたとされ、御師が信者への案内のため作成したものと考えられる。

川口を描いた図をみると、「北口本宮御師宿坊

図」は、川口御師が配布した案内図であり、その内容から、1860(万延元)年の富士山御縁年に配布されたと考えられる図である。図の下部には、川口の町が、図の中央には川口浅間神社が大きく描かれる。そして、上部には富士山が三峰形式で描かれ、山頂への登山道ルートが示されている。「富士山神系御山絵図」も川口御師が配布した案内図であり、版図に彩色が施され、掛け軸となっているものである。図の下方に川口の町と浅間神社が描かれ、富士山は図の中央部に三峰形式で描かれ、山頂への道筋が示される。図の上部には神系図が書かれている。

明治期以降の登山案内図は、内容面では神仏分離政策の影響がみられることと、印刷技術の面では木版画に代わって銅版画が多くみられるようになる点が¹³⁾、江戸時代の図と異なっている。

明治初期に作成されたと推定される「浅間神社図」は、画面の中央に浅間神社が大きく描かれるが、江戸時代の図と比べると仁王門、鐘楼などは描かれなくなっており、図の上部の余白には、旧来の仏教的な地名と対比した新地名が記されている。また、富士山は三峰形式ではなく、写実的に描かれている。「富士山吉田口図」はほぼ同様の図であるが、神社の手前には扶桑教会所が描かれている。「富士山頂上御拝所御霊鏡図」は、神仏分離にあたって、山頂への御霊鏡殿の建立が川口で計画された際に作成されたものである。川口から山頂へのルートが簡略に示され、富士山は三峰形式で描かれている。「富士山之図」と「富士山北面真形絵図」は、同版の図であるが、画面の下部に吉田の浅間神社が描かれ、画面の上部には、頂上部の火口が異様に誇張された富士山が大きく描かれている。「富士山良口便道略図」は、富士吉田の明見からの登山路を示した図で、明見を「良口」と表現している。図は簡略なもので、富士山麓からの登山道だけでなく、東京と甲府、小田原からの道筋が示され、全体として江戸時代の「御山名所道之記」によく似た図である。「富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」は銅版画で、画面の下部半分に吉田の町が詳細に描かれている点に特徴がある。上部には浅間神社が描かれ、その

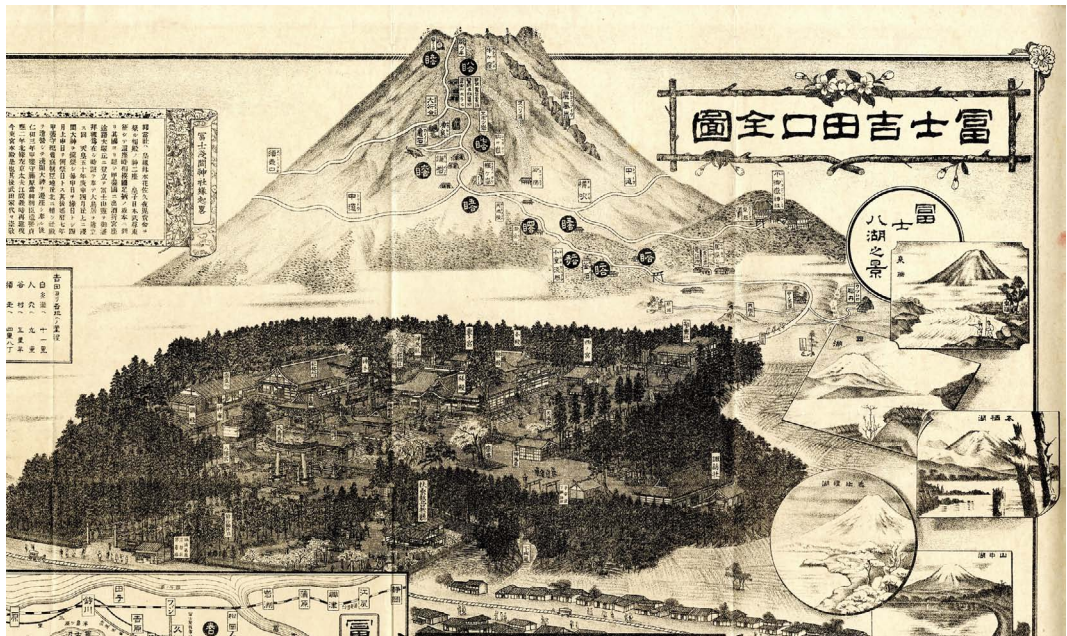


図4 富士吉田口の登山案内図

原図の題名は「富士吉田口全図」、1911（明治44）年発行。原図の部分図。筆者所蔵。

Fig. 4 Mountain-climbing guide map via Fujiyoshida.

The map's title is "Fujiyoshida-guchi zenzu". Published in 1911. Excerpted from original map. Owned by the author.

背後に富士山が写實的に秀麗に描かれている。作画者の霜鳥巴凌は、他の地域に関しても同様な銅版画を多数描いており、発行者の青山豊太郎もこの種の出版物を数多く手掛けていた人物である（芳賀，2013）。

1901（明治34）年以降の「富士山北口全図」ないしは、「富士吉田口全図」と題する図は、いずれも類似した内容の図である。画面の上部半分には浅間神社と富士山が描かれ、下半分には吉田の町が描かれるとともに、左下には富士山の登山道が平面図で示され、また、周囲には富士八湖などの名所が描かれている。図4は、その一例として、1911（明治44）年版の図の富士山と山麓の浅間神社と吉田の町を描いた部分を示したものである。これらは、松島や厳島で明治期以降に多く描かれた、近代の「真景図」¹⁴と類似した画面構成をしており、近代の「真景図」の富士山版であると位置づけることができる。実用的な登山案

内図としての役割ももっていたと考えられるが、他面では土産品としての性格も有していたと思われる。

4) 東口の案内図

東口に関する図をみると、江戸時代の「富士参詣須走口図」は、縦長の図で、画面の下部に須走の集落が、中央部に須走浅間神社、上部に富士山が描かれ、山頂までの道筋が示されており、富士山は三峰形式である。「東面略図」は、江戸や府中から須走口までの道筋ならびに、須走口から富士山頂までの道筋が示された簡略な図である。いずれも作成者は詳らかではないが、須走の御殿が配布したものと考えられる。明治期以降に作成された「富士山東表口新道御殿場停車場図」は、御殿場駅を起点とした登山案内図であり、ここでは御殿場駅からの道を「東表口新道」と称している。御殿場駅を画面下部の中央に配し、そこからの登山道と富士山麓が精緻に描かれている。図の作者

は先に述べた霜鳥巴凌である。「富士山名細図」は、明治後期に作成されているが、手彩色の木版画で、東京、横浜や、静岡方面から富士山麓まで道筋、ならびに登山口から山頂までの道筋が示された図である。登山口は、須走口と御殿場口が中央に描かれ、須山口、村山口、吉田口も描かれている。東口からのみの案内図ではないが、須走御師の系譜を引く者が販売した図であり、東口を中心とした登山案内図とみなすことができる。「富士登山口全図」は、基本的には、富士山の登山道を示した平面図であるが、画面右上には須走の集落とそこからの登山道が鳥瞰図として描かれ、右下には須走口の名所が風景画として示されているので、東口の登山案内図とみることが可能である。1918（大正7）年の「富士登山案内図」は、御殿場駅からの登山道を東表口として中央に描き、東口、南口、北口からの登山道も示された登山案内図である。銅版手彩色の図で登山ルートや鉄道は赤線で示されている。また、図の下段には、欽明水、銀明水、駒ヶ岳、雷ヶ岳、剣ヶ嶺、釈迦之割石の絵が並べて示されている。1920（大正9）年の「富士登山案内図」は、1918（大正7）年の図とほぼ同じ図であるが、画面の中央に描かれているのは東口（須走）であり、図の販売所も須走の伊勢屋商店となっている。「富士山立体図」は特殊な図で、掛け軸仕立てになっており、図の上部には「登拜皇紀二千六百年記念」と「官幣大社奥宮浅間神社」の大きな印が押されている。御殿場駅からの登山道を画面の中央に描き、須走口、吉田口、大宮口からの登山道も描かれている。

総じて、富士登山案内図の作成は、大正期以降低調となるが、その理由としては、富士浅間信仰に基づく富士登山が衰退する一方、観光としての富士登山が盛んとなり、案内図としての役割は次章で検討するパノラマ地図や、平面図の登山案内にとって代わられるようになったことが考えられる。

IV. パノラマ地図における富士山

1) パノラマ地図について

富士山の鳥瞰図は、II章で検討した五雲亭貞秀

の図を先駆とし、III章で検討した図4のような明治期以降に作成された銅版刷による登山案内図を、本章でとりあげる大正期以降の鳥瞰図の前史として位置づけることが可能である。本章では、これらの鳥瞰図の後に、大正期以降に吉田初三郎（1884年生・1955没）を代表的作者として、新たな作風でもってつくられるようになった鳥瞰図をとりあげる。ここではそれらの鳥瞰図をそれ以前の図と区別してパノラマ地図と称することにする。

従来、吉田初三郎らの作品をはじめとする大正期以降の富士山のパノラマ地図を集成したものとしては、富士市立博物館（2013）がある。しかし、同書は企画展に際して作成された小冊子の展示図録であり、富士山を描いた吉田初三郎らの図を徹底して集成したものではない。また、富士山を主題としなくとも、東海道を描いたパノラマ地図には富士山は必ず描かれるし、日本の他地域を主題としたパノラマ地図でも、遠景に富士山を描いたものは無数に存在する。同書は、それらを多数収録しているため、多方面からみたさまざまな富士山のパノラマ地図を集成したという面では貴重であるが、やや焦点が定まっていない感がある。そこで、ここでとりあげる図は、富士山もしくは富士山麓を主題としたか、あるいは主題の1つとして描いたと判断される図に限定したい。その判別の基準としては、作品名に何らかの形で「富士」という名称が含まれているか否かによった。幕末期以降昭和戦前期までにおいて、作品名に「富士」が付されている鳥瞰図のうち、筆者がその画像を確認できたものを示したのが表4である。ここで画像が確認できたというのは、表4の注で示した図録や筆者自身の収集などにより、鳥瞰図の画像が確認できたという意味である¹⁵⁾。

2) 吉田初三郎のパノラマ地図

「大正広重」の異名をとった吉田初三郎（以下、初三郎と略する）は、当初は関西美術院院長を勤めた鹿子木孟郎に洋画を学んだが、鹿子木に商業絵画制作を勧められたことを契機に、商業画家に転身し、1913（大正2）年に京阪電車沿線を鳥瞰図として描き、それが当時の皇太子（後の昭和天

表 4 富士山を描いたおもなパノラマ地図。

Table 4 Panoramic maps of Mt. Fuji.

| 作品名 | 作者 | 発行年 | 発行所 | 大きさ： 縦×横 cm (形態) | 備考 |
|-----------------|-------|----------------|--------------|---------------------|-----------------------------|
| 駿河 富士 | 吉田初三郎 | 1921 (大正 10) | 鉄道省 | 10×38 (見開き) | 鉄道省『鉄道旅行案内』 41-42 頁の間に所収 |
| 官幣大社富士山名所図絵 | 吉田初三郎 | 1922 (大正 11) | 浅間神社社務所 | 17.9×78 | 京都府立総合資料館所蔵 |
| 富士登山と五湖めぐり | 白鳳山人 | 1923 (大正 12) | 須藤孝平 | 18×57 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士身延鉄道案内 | | 1923 (大正 12) 頃 | 富士身延鉄道株式会社 | 17×75 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士山頂ヨリノ眺望ト其交通 | 吉田初三郎 | 1924 (大正 13) | 鉄道省 | 10×38 (見開き) | 鉄道省『鉄道旅行案内』 45-46 頁の間に所収 |
| 富士身延山七面山名所図会 | | 1927 (昭和 2) | 赤誠堂出版部 | 18×78.4 | 個人蔵 (図録) |
| 富士五湖案内図 | | 1927 (昭和 2) | 東雲舎印刷所 | 18×50 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士登山と五湖めぐり図絵 | 金子常光 | 1927 (昭和 2) | 山梨県 | 17.8×78.6 | 個人蔵 (図録) |
| 富士箱根案内図 | | 1927 (昭和 2) | 静岡県駿東郡教育会 | 20.6×78.4 | 個人蔵 (図録) |
| 富士身延鉄道沿線名所図絵 | 吉田初三郎 | 1928 (昭和 3) | 富士身延電気鉄道株式会社 | 17.7×75.5 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士登山と五湖めぐり図絵 | 金子常光 | 1929 (昭和 4) | 山梨県 | 18×78 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士を背景とせる沼津三島 | 吉田初三郎 | 1931 (昭和 6) | 沼津市 | 17.7×74.7 | 沼津市明治史料館所蔵 (図録) |
| 国立公園富士登山と展望御殿場口 | 金子常光 | 1931 (昭和 6) | 御殿場町役場 | 15.6×42.7 (書簡) | 個人蔵 (図録) |
| 富士登山と五湖めぐり | | 1932 (昭和 7) 頃 | 富士山麓電気鉄道株式会社 | 17.7×76 | 個人蔵 (筆者) |
| 国立公園富士箱根案内図 | 湯河俊次 | 1933 (昭和 8) | 観光タイムス社 | 22.1×77 | 個人蔵 (筆者) |
| 富士登山と五湖めぐり | 金子常光 | 昭和初期 | 山梨県 | 15.5×42.5 (書簡) | 個人蔵 (筆者) |

備考に (図録) とあるのは富士市立博物館 (2013) に所収されているもの、(筆者) は筆者所蔵を示す。作者の空欄は不明を意味する。

皇) に賞賛されたことから、鳥瞰図絵師としての道を歩んだ人物である。生涯に 1600 種以上ともいわれる鳥瞰図を作成したとみられており¹⁶⁾、「初三郎式鳥瞰図」ともいわれるその作風は、「中央部を細かく描写する一方で、左右の端を U 字型に曲げて、実際は見えない遠景をパノラマ風に描くところ特徴がある」(堺市博物館, 1999, p. 49) とされる。富士登山案内図よりも広域の空間が描かれる傾向にあるといえる。また、形態は横長の図がほとんどであり、原画は別として、印刷物としてはリーフレット状のものが多い。

初三郎が最初に富士山を描いたのは、1915 (大正 4) 年の鉄道省発行の「富士登山案内」のようであるが (湯原, 2002, p. 129), 筆者が画像を確認できたもっとも早い時期のものは、1921 (大正 10) 年の鉄道省編纂・発行の『鉄道旅行案内』所収の図である。同書は、鉄道院の依頼をうけて

初三郎が全面的に挿図を担当した書物であるが、同書には「駿河 富士」とのタイトル付きで、見開き 2 頁をもって、富士山がなだらかな稜線をもった実景に近い姿で描かれている。もっとも、『鉄道旅行案内』には、鉄道沿線を描いた「初三郎式鳥瞰図」とともに、この「駿河 富士」や「岐阜 長良川鶴飼」「京都 金閣寺」などのような、純粋な風景絵画といえる図が所々に挿入されており、「駿河 富士」は、鳥瞰図というより絵画とみなすほうが適切かもしれない。なお、同書では富士山の絵が表紙にも描かれている。

初三郎による続く作品が 1922 (大正 11) 年の「官幣大社富士山名所図絵」である。タイトルにあるように浅間神社の御神体としての富士山が画面の中央部に緑色で大きく描かれるが、山頂の火口部は赤茶色で拡大して描かれ、点在する事物が短冊の名札で詳しく書き込まれている。山体には

積雪も描かれず、富士山は、信仰の対象としてのためか、武骨な印象のする山として描かれている。そして、画面の右側には房総半島、三浦半島が「つ」の字形に捻じ曲げて収められ、左側には身延山の麓を富士川が「く」の字型に流れる形で描かれている。

続く初三郎の図は、1924（大正13）年の鉄道省編纂の『鉄道旅行案内』所収の「富士山頂ヨリノ眺望ト其交通」である。同書は、同じく初三郎が挿画を担当した1921（大正9）年版の改訂版であるが、挿画全130点のうち、54点が新たに描き起こされ、18点が全面的に描き改められ、姿を消した挿画が31点あるとされる（堀田, 2009, p. 40）。「富士山頂ヨリノ眺望ト其交通」は1921（大正9）年版にはない図で、タイトルからは富士山頂からの眺めを描いた図のように受けとれるがそうではない。火口部が大きく描かれた富士山が画面の中央に配置された、先の「官幣大社富士山名所図絵」とまったく同じ構図の図である。ただし、鉄道の路線が太い赤字で強調して描かれている点や、富士山に関しては山頂へ至る登山道が描かれていることが異なる。また、1921（大正9）年版にみられた「駿河 富士」の挿画は姿を消し、代わりに「三保の松原」と称した、遠景に富士を配した天女の絵が挿入されている。なお、鉄道省編纂の『鉄道旅行案内』は、1921（大正10）年以前においても、また1924（大正13）年以後においても発行されているが、初三郎がその作成に関わり、その鳥瞰図が収録されているのは、両年発行のもののみである（平田, 2012）。

昭和初期の初三郎の作品としては、1928（昭和3）年の「富士身延鉄道沿線名所図絵」と1931（昭和6）年の「富士を背景とせる沼津三島図」がある。前者は、同年に東海道線の富士駅から中央線の甲府駅を結ぶ鉄道として開通した富士身延鉄道の沿線を描いた図であるが、横長の画面の右半分に大きく富士山が描かれている（図5）。図にみるように、富士山は実際よりは急峻な形で、白雪を冠した秀麗な姿をもって描かれており、美的に理想化された姿をみることができる。「富士を背景とせる沼津三島」は、題名のとおり

沼津と三島の町を主題としつつ、背景に富士を描いた図であるが、富士山は同様に白雪を冠している。富士を背景して2つの町を描くというコンセプトのためか、裾野が大きく広がる形で富士山の稜線は非常になだらかに描かれている。

3) 金子常光ほかのパノラマ地図

吉田初三郎以外の鳥瞰図作者として注目されるのが金子常光（以下常光と略する）である。常光は初三郎の一番弟子であったとされるが、初三郎の興した「大正名所図会社」の専務であった小山吉三が分派して1922（大正11）年に「日本名所図絵社」を設立した際に引き抜かれ、初三郎とは袂を分かたつ形で、多数の鳥瞰図を作成し続けた人物である（長瀬, 2000a, p. 4-5）。画風は、本来の視野では画面に入らないはずの風物を、デフォルメして画面に押し込めるといった構図の点では初三郎に類似するが、絵のタッチは異なっている。常光による、作品名に「富士」の名を含む鳥瞰図は、知りうる限りでは、1927（昭和2）年の「富士登山と五湖めぐり図絵」が最初であり、続くのが1929（昭和4）年の「富士登山と五湖めぐり図絵」である。両者はほとんど同じ図であり、後者の図には前者の図の改版と記されている。図6は、1929（昭和4）年の同図の富士山を中心とする部分を示したものである。図は北側からみた富士山を描いており、山麓部には題目にあるように富士五湖が描かれている。富士山は吉田口からを主とする山頂へ向かう道路が強調して描かれており、富士山はその山体の美を描くのではなく、登頂する観光の対象として描かれていることがうかがえる。また、図中には自動車（乗合自動車）が赤色で印象深く描かれ、「馬返し」へと向かう自動車も描かれている。鳥瞰図の裏面の解説によると、吉田の「浅間神社から馬返しまでには自動車道開通し四十分位で達することが出来る」とある。富士山の自動車道が整備され、五合目まで自動車で行けるようになるのは、第二次世界大戦後のことであるが、この鳥瞰図ではその先駆を示す表現がなされており、富士登山が大衆的なツーリズムの対象となりはじめた時代の様子を読みとることがきる。なお、1927（昭和2）年の図には自

動車の姿は描かれておらず、この頃に急速に交通手段の変化が生じていたことがうかがえる。

常光による他の図としては、年次は記されていないが、富士山麓を走る自動車が描かれていることから、1929（昭和4）年以降の作品と考えられる「富士登山と五湖めぐり」がある。この図も同様に富士を北側から描いたもので、中央に富士山が、山麓に富士五湖が描かれ、図の右側には富士川と身延山、左側に箱根山などが富士山麓をとり囲むようにU字型に配置されている。また、1931（昭和6）年の「国立公園富士登山と展望御殿場口」は、富士山を東側から見て、東側からの登山口である御殿場駅周辺を図の中心に置き、そこから山頂までの登山道を描いた図である。富士山は赤く描かれ、朝日を浴びた富士山を表現したものと思われる。

初三郎と常光以外の作者が判明する図としては、1933（昭和8）年発行の「国立公園富士箱根案内図」がある。図の作者は湯河俊次であり、湯河は沼津の鳥瞰図絵師で、大正期より第二次世界大戦後にかけて鳥瞰図を多く作成し、「静岡の初三郎」と称され、作品は明るく見やすい観光図が多いとされる（長瀬、2000b, p. 23）。「国立公園富士箱根案内図」は、北側からみた富士山が図の3分の2ほどを占める図であるが、そこに描かれた富士山を示したのが図7である。富士山は五合目より上部は薄い朱色、それよりも下は鮮やかな緑色で描かれる。確かに明るい印象を与える図であるが、河口湖や吉田方面をはじめとする、山麓から数多く伸びる登山道が、緑の山麓を傷つける印象が強く、痛々しささえ感じさせる。第二次世界大戦後のスパルラインをはじめとする自動車道による富士山の環境破壊を予兆するかのような図である。

ほかに作者が判明する図として、1923（大正12）年の白鳳山人による「富士登山と五湖めぐり」があるが、著者がどのような人物であるかは不明である。この図は、他の同名のタイトルの図と同様に富士山を北側から描き、山麓に富士五湖を配した図である。初三郎や常光あるいは湯河の作品のように、見えるはずのない遠景を描くことはな

く、北側から見える実景を描いたといえる図である。

他の作者が判明しない図について概観すると、1923（大正12）年頃の発行「富士身延鉄道案内」は、右側に富士山、左側に身延山が等置される形の構図をもった図であり、富士大宮から富士山頂への登山道が記されている。1927（昭和2）年の「富士身延山七面山名所図会」は、構図も描画のタッチも初三郎の鳥瞰図に似た図で、図の中央に身延山、左側に七面山、右側に富士山が描かれ、裏面には身延山久遠寺の概要が記されている。1927（昭和2）年「富士五湖案内図」は富士山を北側から描き、文字通り周辺に五湖を配置した図であるが、絵画表現は稚拙な印象が強い。1927（昭和2）年の「富士箱根案内図」は、南側から富士山と箱根を鳥瞰した図であり、東は小田原、西は富士川までの範囲が描かれた図である。富士山は二合目付近まで積雪が示され、麓の各登山口からの登山道が描かれている。1932（昭和7）年頃の「富士登山と五湖めぐり」は、青色単色刷の図で、横長の画面中央に、山頂部に雪を冠し、なだらかな稜線をもった富士山が北側からみた姿で描かれている。

V. おわりに

本稿では、富士山を描いた絵画について、おおよそ、日本絵画、登山案内図、パノラマ地図の3種に分けてその概略を紹介してきた。従来、日本絵画に関する領域では、美術史研究者によって多くの研究がなされてきたが、登山案内図やパノラマ地図をも「絵画」としてとらえ、絵画に表現された富士山を総合的に紹介した研究はなく、本研究の基本的な意義はそこにある。もっとも、本稿で紹介したような登山案内図を、芸術作品としての絵画と同列に扱うことには無理があるかもしれない。しかし、五雲亭貞秀の鳥瞰図に関しては従来多少なりとも美術史の分野で扱われてきたが、「大正広重」と称された吉田初三郎や、金子常光のパノラマ地図は、「絵画」として、II章で紹介した富士山を描いた日本絵画を集成した書物にはまったく収録されておらず、近代の富士山の絵画



图 5 (Fig. 5)

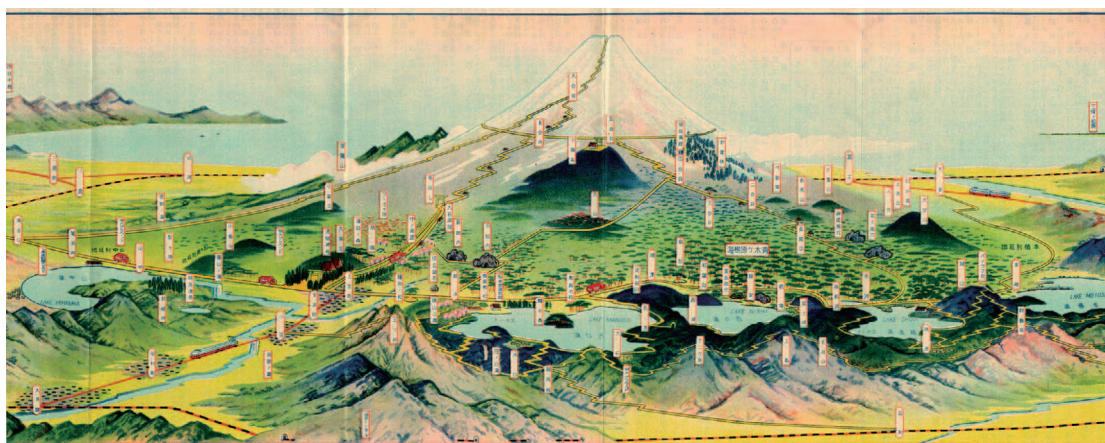


图 6 (Fig. 6)

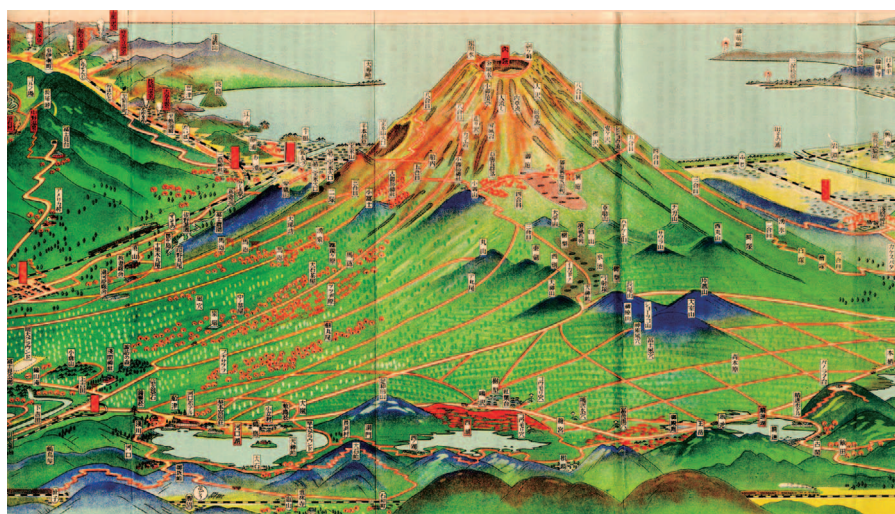


图 7 (Fig. 7)

の解説においても触れられていない。パノラマ地図が、従来美術史の分野でまったく扱われてこなかったことは、研究史上の欠落であったといえよう。なぜならば、初三郎らのパノラマ地図と同様に、印刷物として多量に流布した通俗的な商業絵画ともいえる江戸時代の葛飾北斎や歌川広重の絵画は、美術史においては大きくとりあげられてきたからである。一方、初三郎らのパノラマ地図は、絵画としてではなく「絵のような地図」として、従来、主として地図愛好家や地理学者によって研究が進められてきた。そのため、地理学において、絵画に表現された富士山を論じるにあたっては、初三郎らのパノラマ地図は欠かすことのできない対象である。

そして、本稿の日本絵画の検討においては、富士山は古代・中世には近寄り難い存在として、その霊性への関心が強かったこと、近世にはその傾向は薄れ、画家が目にしたもの、実際に登山した経験を反映したものが表現されるようになったこと、登山案内図の検討では、近世・近代を通じて、山岳信仰の対象として登頂する山として表現されていたことを示した。続く大正期以降のパノラマ地図の検討においては、富士山は、鉄道や自動車を用いた近代的なツーリズムの対象として表現されていたことを示した。総じて、本稿でとり

あげた富士山を描いた絵画における、表現内容の変遷の背景には、富士山が信仰の山から観光の山へと変貌していったことをみてとることができる。

注

- 1) 鳥瞰図とはその名のとおりに、鳥の目をもって、地表を斜め上空から眺めて、絵画風に描いた図である。地図の一種ともいえるが、描かれる対象の縮尺や方位は正確なものではない。その意味では絵画と地図の中間的な様式をもった図とみなすことができ、絵画史研究の文脈でも、地図史研究の文脈でも扱うことが可能である。なお、鳥瞰図を純粋な風景画と峻別することは困難であるが、筆者は図中に短冊で描かれる対象物の名称が記入されているか否かで判別してもよいと考えている。絵画では美的表現を損ねる短冊は記されず、鳥瞰図では案内図としての性格から、通常は対象物の名称が短冊で示されるのである。
- 2) 三好唯義の解説（神戸市立博物館、2000、p. 110）による。以下、本文中では、五雲亭貞秀の呼称で統一することにする。
- 3) 本章の2)節、3)節における個々の画家・作品に関する情報や評価は、本文中に示した富士山の絵画に関する通史や作品解説に基づく。煩瑣になることを避けるため、逐一典拠を示すことは行わなかったが、必要と判断した箇所には、適宜典拠を提示した。
- 4) ただし、本文で示した富士山画を集成した書物のなかには、近現代の作品が多数収録されている。また、近代の富士山画に限定した解説としては宝木（2000）、河田（2008）がある。
- 5) 長谷川等伯ないしはその一門の作との説もある（成瀬、2005、p. 50）。

図 5 吉田初三郎による富士山のパノラマ地図。

原図の題名は「富士身延鉄道沿線名所図絵」。1928（昭和3）年発行。原図の部分図。筆者所蔵。

Fig. 5 Panoramic map by Yoshida Hatsusaburo.

The map's title is "Fuji-minobe testudo ensen meisho zue". Published in 1928. Excerpted from original map. Owned by the author.

図 6 金子常光による富士山のパノラマ地図。

原図の題名は「富士登山と五湖めぐり図絵」。1929（昭和4）年発行。原図の部分図。筆者所蔵。

Fig. 6 Panoramic map by Kaneko Jyoko.

The map's title is "Fuji tozan to goko meguri zue". Published in 1929. Excerpted from original map. Owned by the author.

図 7 湯河俊次による富士山のパノラマ地図。

原図の題名は「国立公園富士箱根案内図」。1933（昭和8）年発行。原図の部分図。筆者所蔵。

Fig. 7 Panoramic map by Yukawa Shunji.

The map's title is "Kokuritsu koen Fuji-hakone annai zu". Published in 1933. Excerpted from original map. Owned by the author.

- 6) 山下 (2002), には, 頂上図の嚆矢として, 小泉檀山の「富士山真状」画冊 (東京都立中央図書館蔵) があげられているが, その所在は確認できなかったため, ここでは, 福士 (2013) に基づき「富士登岳図巻」をとりあげた。
- 7) ただし, 鳥居ほか (1998) には, 「大日本富士山絶頂之図」とともに, 「三国第一山之図」「富士詣独案内」「不二両道一覽之図」について画像が掲載され, 鳥居による作品解説が記されている。また, 平林ほか (2008, p. 25) には, 「大日本富士山絶頂之図」がとりあげられ, 作品解説がつけられており, 富士山世界文化遺産登録推進両県合同会議 (2013, p. 59) には, 解説はないが, 富士山の百画の1つとして, 同図がとりあげられている。
- 8) 同書には巻末に富士登山案内図の一覽 (全90点) が示され, 主要なもの56点に関しては, 画像と作品解説が収録されており, 登山案内図全体の総論的な解説も収録されている。
- 9) 同書では富士登山案内図を登山口ごとに区分するとともに, 頂上図という区分も設け, 頂上部のみを描いた図もとりあげており, また, 浅間神社の祭礼図なども収録している。しかし, これらは富士登山案内図とはいえないので検討の対象外とした。
- 10) 以下の本文中における個々の案内図に関する記述は, 特別に注をつけた部分以外は, 富士吉田市歴史民俗博物館 (2000) 所収の作品解説と, 筆者の画像の読みとりによるものである。煩瑣になるため逐一典拠を示すことは行わなかった。
- 11) 江戸時代の図で作成年次が明らかなのは少ないが, 図中に1758 (宝暦8) 年に立てられた「富士山道」の道標が記されることから, それ以後に作成されたと判断される図が多くある (富士吉田市歴史民俗博物館, 2000, p. 82)。それらについては表3では江戸時代後期とした。なお, このことをふまえて, 荻野 (2011) は, 表口の登山案内図の作成は18世紀後半以降と考えられるとしている。
- 12) 興法寺という寺は存在せず, 村山の辻之坊・大鏡坊・池西坊の三坊と, 村山浅間神社・大日堂・大棟梁権現などを包括して興法寺と呼んでいたと考えられている (富士吉田市歴史民俗博物館, 2000, p. 82)。
- 13) 明治後期以降は, 銅版印刷に代わって石版印刷が普及するようになる。そのため, 明治後期以降の図は, 石版印刷によるものが少なくないと考えられるが, 表2では富士吉田市歴史民俗博物館 (2000) の記載に従って銅版印刷によるものとした。
- 14) 松島や巖島で, 明治期から昭和初期かけて数多く作成された鳥瞰図には, タイトルに「真景」という言葉が用いられることが多い。ただし, ここで用いられている「真景」という言葉の意味は, 近世南画における, 画家の心意が込められた風景としての「真景」とは異なり, 単に写実的な風景を指す言葉として用いられる傾向にあった。そのため筆者は, これらの図は近世南画の「真景図」と区別して, 近代の「真景図」と総称することが適当であると考えている (中西, 2010, p. 61)。
- 15) 湯原 (2002), p. 129, 所載の吉田初三郎の鳥瞰図作品目録によると, 「富士」の名が作品名にある初三郎

の鳥瞰図は, 表4に示したものの以外に以下のものがある。富士登山案内 (1915, 鉄道省), 富士山名所図会 (1919), 富士登山案内 (1922, 鉄道省), 富士登山案内〔富士登山図絵〕 (1922, 大正名所図会社), 富士須走口駿河登山案内 (1923, 小山町保勝会)。

- 16) 初三郎の作品数は膨大であり, その総数については諸説あるが, パノラマ地図に関しては1600種以上というのが共通した理解のようである (堺市博物館, 1999, p. 51)

文 献

- 富士市立博物館編 (2013): 鳥の目で見た富士—鳥瞰図の世界—。[Fuji Municipal Museum ed. (2013): *Bird's-eye Views of Mt. Fuji (Tori No Me De Mita Fuji: Chokanzu No Sekai)*. (in Japanese)*]
- 富士吉田市歴史民俗博物館編 (2000): 富士山登山案内図。[Fujiyoshida Museum of Local History ed. (2000): *Mountain Climbing Guide Maps (Fuji Tozan Annai Zu)*. (in Japanese)*]
- 福士雄也 (2013): 富士画1000年史。芸術新潮, **2013-9**, 32-69。[Fukushi, Y. (2013): Thousand years history on the pictures of Mt. Fuji. *Geijutsu Shincho*, **2013-9**, 32-69. (in Japanese)*]
- 芳賀明子 (2013): 明治期風景銅版画をめぐって—埼玉を描いた『博覧図』(精行社)一。埼玉県立文書館紀要, **26**, 41-86。[Haga, A. (2013): Copperplate prints of Landscape in the Meiji Era: "Hakuranzu" of Saitama Prefecture. *Saitama Kenritsu Monjyokan Kiyo*, **26**, 41-86. (in Japanese)*]
- 平林 彰・和田佐知子・太田智子編 (2008): 富士山近代に展開した日本の象徴。山梨県立美術館。[Hirabayashi, A., Wada, S. and Oota, T. eds. (2008): *Mt. Fuji: Japanese Symbol in Modern Times (Fujisan: Kindai Ni Tenkai Shita Nippon No Shocho)*. Yamanaishi Prefectural Museum of Art. (in Japanese)*]
- 平田剛志 (2012): 鉄道省編『鉄道旅行案内』諸版の比較研究。Core Ethics, **8**, 513-523。[Hirata, T. (2012): A comparative study of railway trip guide editions published by the Ministry of Railways. *Core Ethics*, **8**, 513-523. (in Japanese with English abstract)]
- 堀田典裕 (2009): 吉田初三郎の鳥瞰図を読む—描かれた近代日本の風景—。河出書房新社。[Hotta, Y. (2009): *Bird's-eye Views of Yoshida Hatsusaburo: The Painted Scenery of Modern Japan (Yoshida Hatsusaburo No Chokanzu Wo Yomu: Egakareta Kindai Nippon No Fuukei)*. Kawade Shobo Shinsha. (in Japanese)*]
- 河田明久 (2008): 富士図の近代。平林 彰・和田佐知子・太田智子編: 富士山近代に展開した日本の象徴。山梨県立美術館, 7-13。[Kawada, A. (2008): The pictures of Mt. Fuji in modern Japan. in *Mt. Fuji: Japanese Symbol in Modern Times (Fujisan: Kindai Ni Tenkai Shita Nippon No Shocho)* edited by Hirabayashi, A., Wada, S. and Oota, T., Yamanaishi Prefectural Museum of Art, 7-13. (in Japanese)*]

- 神戸市立博物館編 (2000): 絵図と風景. [Kobe City Museum ed. (2000): *Pictorial Maps and Scenery (Ezu To Fuukei)*. (in Japanese)*]
- 河野元昭 (2013): 日本絵画にみる富士. 高階秀爾・近藤誠一・河野元昭・竹内 誠・山折哲雄・田中優子・金子賢治 (高階秀爾監修): 日本の美 V 富士山. 美術年鑑社, 14-21. [Kono, M. (2013): Mt. Fuji in Japanese painting. in *Japanese Sence of Beauty*, by Takashina, S., Kondo, S., Kono, M., Takeuchi, M., Yamaori, T., Tanaka, Y. and Kaneko, K., Bijutsu-Nenkansha, 14-21. (in Japanese)*]
- 長瀬昭之助 (2000a): 「吉田初三郎」雑考 I 大正広重時代. 古地図研究, **307**, 1-7. [Nagase, A. (2000): Memorandum on Yoshida Hatsusaburo I: The age of "Taisho-Hiroshige". *Antique Map (Kochizu Kenkyu)*, **307**, 1-7. (in Japanese)*]
- 長瀬昭之助 (2000b): 「吉田初三郎」雑考 III 初三郎と関係した人物と場所. 古地図研究, **307**, 20-26. [Nagase, A. (2000): Memorandum on Yoshida Hatsusaburo III: The People and places related to Hatsusaburo. *Antique Map (Kochizu Kenkyu)*, **307**, 20-26. (in Japanese)*]
- 中西僚太郎 (2010): 明治・大正期の巖島を描いた鳥瞰図. 歴史人類, **38**, 58-82. [Nakanishi, R. (2010): Pictorial maps of Itsukushima in the Meiji and Taisho Eras. *History and Anthropology*, **38**, 58-82. (in Japanese)]
- 中野好夫・成瀬不二雄 (1982): 百富士. 毎日新聞社. [Nakano, Y. and Naruse, F. (2009): *One Hundred Pictures of Mt. Fuji (Hyaku Fuji)*. Mainichi Shinbunsha. (in Japanese)*]
- 成瀬不二雄 (1982): 富士図の歴史. 中野好夫・成瀬不二雄: 百富士. 毎日新聞社, 178-212. [Naruse, F. (1982): History on the Pictures of Mt. Fuji. in *One Hundred Pictures of Mt. Fuji (Hyaku Fuji)* by Nakano, Y. and Naruse, F., Mainichi Shinbunsha, 178-212. (in Japanese)*]
- 成瀬不二雄 (2000): 富士山の絵画. 鈴木 進・成瀬不二雄・永田生慈・宝木範義・灰野昭郎 (鈴木 進監修): 日本の美 富士. 美術年鑑社, 151-157. [Naruse, F. (2000): The pictures of Mt. Fuji. in *Japanese Sense of Beauty Mt. Fuji* by Suzuki, S., Naruse, F., Nagata, S., Takaragi, N. and Haino, A., Bijutsu-Nenkansha, 151-157. (in Japanese)*]
- 成瀬不二雄 (2005): 富士山の絵画史. 中央公論美術出版. [Naruse, F. (2005): *History of the Pictures on Mt. Fuji (Fujisan No Kaigashi)*. Chuo-Koron Bijutsu Shuppan. (in Japanese)*]
- 荻野裕子 (2011): 富士登拝案内絵図—富士村山修験者たちの画策—. 創碧社編: 人はなぜ富士山頂をめざすのか. 財団法人静岡県文化財団, 92-113. [Ogino, Y. (2011): Mountain-climbing guide maps of Mt. Fuji: Strategy of Fuji-Murayama-Shugenja. in *Why Do Japanese Aim at Climbing to the Top of Mt. Fuji (Hito Wa Naze Fuji Sancho Wo Mezasu No Ka)* edited by Sohekisha, Shizuoka Cultural Foundation, 92-113. (in Japanese)*]
- 堺市博物館編 (1999): パノラマ地図を旅する—「大正の広重」吉田初三郎の世界—. [Sakai City Museum ed. (1999): *Traveling on Panorama Maps: The World of Yoshida Hatsusaburo, "Taisho-Hiroshige"* (*Panorama Chizu Wo Tabisuru: "Taisho No Hiroshige", Yoshida Hatsusaburo No Sekai*). (in Japanese)*]
- 静岡県立美術館編 (2004): 富士山の絵画 収蔵品図録. [Shizuoka Prefectural Museum of Art. ed. (2004): *Pictures of Mt. Fuji: Pictorial Records of Collection (Fujisan No Kaiga: Shuzohin Zuroku)*. (in Japanese)*]
- 富士山世界文化遺産登録推進両県合同会議編 (2013): 富士山百画. 美術出版社. [Shizuoka-Yamanashi Joint Council for Fujisan World Cultural Heritage Registration ed. (2005): *Selection Committee of 100 Portraits of Fujisan*. Bijutsu Shuppan-sha. (in Japanese with English)]
- 鈴木 進・成瀬不二雄・永田生慈・宝木範義・灰野昭郎 (鈴木 進監修) (2000): 日本の美 富士. 美術年鑑社. [Suzuki, S., Naruse, F., Nagata, S., Takaragi, N. and Haino, A. (2000): *Japanese Sense of Beauty Mt. Fuji*. Bijutsu-Nenkansha. (in Japanese)]
- 宝木範義 (2000): 近代絵画における富士山. 鈴木 進・成瀬不二雄・永田生慈・宝木範義・灰野昭郎 (鈴木 進監修): 日本の美 富士. 美術年鑑社, 162-169. [Takaragi, N. (2000): Mt. Fuji in the modern pictures. in *Japanese Sense of Beauty Mt. Fuji* by Suzuki, S., Naruse, F., Nagata, S., Takaragi, N. and Haino, A., Bijutsu-Nenkansha, 162-169. (in Japanese)*]
- 高階秀爾・近藤誠一・河野元昭・竹内 誠・山折哲雄・田中優子・金子賢治 (高階秀爾監修) (2013): 日本の美 V 富士山. 美術年鑑社 [Takashina, S., Kondo, S., Kono, M., Takeuchi, M., Yamaori, T., Tanaka, Y. and Kaneko, K. (2013): *Japanese Sence of Beauty, Fujisan*. Bijutsu-Nenkansha. (in Japanese)]
- 竹谷鞆負 (1998): 富士山の精神史—なぜ富士山を三峰に描くのか—. 青山社. [Takeya, Y. (1998): *Japanese Spirit on Mt. Fuji: Why Do Japanese Paint Mt. Fuji as a Three Peak Mountain (Fujisan No Seishinshi: Naze Fujisan Wo Mitsumine Ni Egakunoka)*. Seizansha. (in Japanese)*]
- 鳥居和之・岡田 彰・米屋 優・楠井章代編 (1998): 日本の心 富士山の美展. NHK名古屋放送局. [Torii, K., Okada, A., Yoneya, M. and Kusui, A. eds. (1998): *Special Exhibition: The Spirit of the Japanese, "The Beauty of Mt. Fuji"*. NHK Nagoya Hosokyoku. (in Japanese)]
- 山梨県立美術館編 (2005): 絵になった富士山. [Yamanashi Prefectural Museum of Art ed. (2005): *Mt. Fuji in Pictures (E Ni Natta Fujisan)*. (in Japanese)*]
- 山下善也 (1998): 描かれた富士—イメージ変遷と諸相—. 鳥居和之・岡田 彰・米屋 優・楠井章代編: 日本の心 富士山の美展. NHK名古屋放送局, 218-228. [Yamashita, Y. (1998): Mt. Fuji in pictures:

- Change of the image and the various aspects. in *Special Exhibition: The Spirit of the Japanese, "The Beauty of Mt. Fuji"* edited by Torii, K., Okada, A., Yoneya, M. and Kusui, A., NHK Nagoya Hosokyoku, 218-228. (in Japanese)*]
- 山下善也 (2002): 富士の絵 その展開と諸相. 青弓社編集部編: 富士山と日本人. 青弓社, 36-55. [Yamashita, Y. (1998): Pictures of Mt. Fuji: The various aspects. in *Mt. Fuji and Japanese (Fujisan To Nipponjin)* edited by Aoyumisha Henshubu, Aoyumisha, 36-55. (in Japanese)*]
- 湯原公浩編 (2002): 別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図. 平凡社. [Yuhara, K. ed. (2002): *Extra Issue Taiyo, Panorama Maps of Yoshida Hatsusaburo (Bessatsu Taiyo, Yoshida Hatsusaburo No Panorama Chizu)*. Heibonsha. (in Japanese)*]
- 湯原公浩編 (2003): 別冊太陽 パノラマ地図の世界. 平凡社. [Yuhara, K. ed. (2003): *Extra Issue Taiyo, The World of Panorama Maps (Bessatsu Taiyo, Panorama Chizu No Sekai)*. Heibonsha. (in Japanese)*]
- * Title etc. translated by R.N.